

## 魯迅翻訳『思想・山水・人物』（鶴見祐輔著）についての覚え書（上）

关于《思想・山水・人物》（鲁迅译，鹤见祐辅著）的札记（上）

中井政喜

Masaki NAKAI

1. はじめに
2. 作品翻訳の時点による時系列と未翻訳作品
3. 翻訳された諸作品の4つの時期
  - 3.4 時期Ⅲ（1927年4・12反共クーデター以後、1928年1月「革命文学」論争の開始以前）の翻訳作品（1927年10月、広州から上海に行く）（以上今号）
  - 3.5 時期Ⅳ（1928年1月「革命文学」論争の開始以後、1928年4月3日『思想・山水・人物』訳了まで）の翻訳作品（上海に居住）
4. さいごに

### 1. はじめに

小論の目的は、<sup>1</sup>『思想・山水・人物』（鶴見祐輔著、大日本雄辯会、1924・12・28初版、魯迅入手年月日、1925・2・13〈第3版を入手〉）、『思想・山水・人物』（魯迅訳、北新書局、1928・5）、使用した底本は『魯迅訳文全集』第3巻（福建教育出版社、2008・3）の諸作品の翻訳について、魯迅の翻訳意図を中国の当時の時代状況、魯迅自身の思想状況を背景において推測することにある。<sup>2</sup>

入手年月日について、『日記十四』（1925年、『魯迅全集』第15巻、人民文学出版社、2005・11〈以下、2005年版と略記〉）の「書帳」に以下の記載がある。

「思想山水人物一本 二・〇〇 二月十三日」（「書帳」、『日記十四』（1925年））  
『日記十四』（1925年）の2月13日の項には、「往東亜公司買《思想山水人物》一本、二元。」とある。また、『魯迅手蹟和蔵書目録3（内部資料）』（北京魯迅博物館編、1959・7）によれば、「思想、山水、人物 鶴見祐輔著 大正十三年（1924） 東京大日本雄辯会 三版 精装」とある。

以上に基づき、魯迅は1925年2月13日に『思想・山水・人物』の第3版を入手したと思われる。<sup>3</sup> 訳了の時期について、『日記十七』（1928年、『魯迅全集』第16巻、2005年版）の1928年4月3日の項に、「訳『思想・山水・人物』迄。」とある。

また上記のように、魯迅の翻訳本は、『思想・山水・人物』（北新書局、1928・5、北海道大学所蔵本を参照した<sup>4</sup>）として出版された。

## 2. 作品翻訳の時点による時系列と未翻訳作品

『思想・山水・人物』（『魯迅訳文全集』第3巻、福建教育出版社、2008・3）の注記は次のように説明する。

「『思想・山水・人物』 日本鶴見祐輔（1885～1972）の随筆集。魯迅は1925年4月から1928年3月まで<sup>5</sup>前後して20篇を選択翻訳して1冊に集め、1928年5月北新書局から出版した。その中の13篇（原序を含めて）の訳文は単行本に収録される以前に、それぞれ当時の新聞雑誌（『京報副刊』、『民衆文芸週刊』、<sup>6</sup> 半月刊『莽原』、週刊『北新』、半月刊『北新』、週刊『語絲』）に発表された。作者鶴見祐輔は日本の評論家。主要な著書にはなお『南洋遊記〔南洋遊記〕』、『欧美名士印象記〔欧米名士の印象〕』、『拜命伝〔英雄天才史伝バイロン〕』等がある。」（〔〕内は中井の注記。以下同じ。）

『思想・山水・人物』を一読すると、内容は随筆に近いもので（鶴見祐輔は「随想」〈「序言」〉と言う）、読みやすく分かりやすく書かれている。主として英米の政治家（自由主義的政治家等）の経歴と人間性、考え方・生き方の紹

介、その政治思想（自由主義）を取りあげて話題とし、また北米、欧州、北京などの紀行文も多く掲載されている。魯迅の翻訳の時点は、ほとんどが著作の時間と近く、同時代の作品の翻訳と言える。

魯迅は『『思想・山水・人物』題記』（1928・3・31、「關於『思想山水人物』」、週刊『語絲』第4巻第22期、1928・5・28）で次のように言う。

「作者の専門は法学で、この本の帰趨は政治であり、提唱するところは自由主義である。私はこれらについてははっきりとは解らない。ただ、英米の現情勢と国民性に関する観察、数人の人物、例えばアーノルド、ウィルソン、モーレーに関する評論は、みな明快での中しているところがあり、滔々として立て板に水で、思わず知らぬまに読み終えさせる。青年の中にもこれらの文章を読みたい人がかなりいるとのことである。」

いま、『思想・山水・人物』（北新書局、1928・5）に収録された作品を中心に、翻訳された時点の時系列によって下記に配列する。

## 2.1 単行本（北新書局、1928・5）に収録される以前に翻訳発表された諸作品（12篇）

単行本に収録される以前の諸作品12篇（「序言」を除く）は以下のとおりである。

- ①「自以為是」（『京報副刊』1925年4月14日、『京報副刊』の題名「沾沾自喜」、魯迅訳、<sup>7</sup>「ひとりよがり」）
- ②「徒然的篤学」（『京報副刊』1925年4月25日、魯迅訳、「空しき篤学」）
- ③「北京的魅力」（『民衆週刊』第26期～29期、1925年6月30日～7月21日、魯迅訳、「北京の魅力」）
- ④「所謂懷疑主義者」（1926・7・10訳、週刊『莽原』第14期、1926・7・25、魯迅訳、「懷疑主義者ということ」）
- ⑤「説幽默」（1926・12・7訳、半月刊『莽原』第2巻第1期、1927・1・10、魯迅訳、「ユーモアに就て」）
- ⑥「読的文章和听的文字」（1927・5・31訳、半月刊『莽原』第2巻第13期、1927・7・10、魯迅訳、「読む文章と聴く文章」）

- ⑦「書齋生活与其危険」（1927・6・1訳、半月刊『莽原』第2巻第12期、1927・6・25、魯迅訳、「書齋生活とその危険」）
- ⑧「専門以外の工作」（1927・6・21訳、週刊『語絲』第142、143期、1927・7・31、8・6、魯迅訳、「専門外の仕事」）
- ⑨「善政和悪政」（1927・6・27以前訳了、<sup>8</sup> 週刊『北新』第39、40期合刊、1927・7・15、魯迅訳、「善政と悪政」）
- ⑩「人生的轉向」（1927・6・27以前訳了、週刊『北新』第41、42期合巻、1927・8・5、8・12、魯迅訳、「人生の轉向」）
- ⑪「閑談」（1927・6・27以前訳了、週刊『北新』第43、44期合巻、1927・8・17、8・25、魯迅訳、「閑談」）
- ⑫「断想」（1927・6・27以前訳了、<sup>9</sup> 第1節～第7節、週刊『北新』第45～52期、1927・9・2～10・20、第8節～27節、半月刊『北新』第2巻第1～5期、1927・11・1～1928・1・1、魯迅訳、「断想」）

そのほか、作品ではない「序言」も、単行本出版以前に翻訳された。「『思想・山水・人物』序言」（第1頁～第9頁、全9頁、1924・7・4）は、「1, 序言」（1928・3・31訳、「關於『思想山水人物』」、週刊『語絲』第4巻第22期、1928・5・28、魯迅訳）として発表された。また、魯迅執筆の「『思想・山水・人物』題記」は、「2, 題記」（1928・3・31、「關於『思想山水人物』」、前出）として掲載された。

## 2.2 1928年5月の単行本出版以前において、未発表の諸作品の篇目（8篇）

単行本出版以前に未発表で、出版時に収録された諸作品は8篇あり、それらは1927年10月ころ以降1928年4月3日までに翻訳されたと推測される。「題記」（1928・3・31、前出）では次のように言う。

「旧訳を点検してみると、長短すでに12篇あり、上海の〈革命文学〉の涌きあがる声の中、ガラス窓の下で、いっそさらに8篇を訳しまとめて1本とし、印刷に付した。」

上海の「革命文学」（無産階級革命文学）の唱導は1928年1月からであり、これに従えばこの8篇は、魯迅が1927年10月広州から上海に逃れた以降の、

1928年1月から1928年4月3日までに翻訳された可能性が高いことになる。

- ⑬「読書的方法」（「読書の方法」全10章、第144頁～第154頁、<sup>10</sup> 全11頁、1923・8・14）
- ⑭「論辦事法」（「執務法について」全1章、第155頁～第160頁、全6頁、1923・8・26）
- ⑮「往訪的心」（「訪れてゆく心」全10章、第160頁～195頁、全36頁〈写真1枚、1頁分含む〉、日付なし）
- ⑯「指導底地位的自然化」（「指導的地位の自然化」全6章、第207頁～第220頁、全14頁、1923・6・28）
- ⑰「旧游之地」（「曾遊山河」全6章、第285頁～第310頁、全26頁、日付なし）
- ⑱「説自由主義」（「自由主義について」全11章、第273頁～第284頁、全12頁、1924・7・4）
- ⑲「説旅行」（「旅ということ」全4章、第412頁～第417頁、全6頁、1923・2・25）
- ⑳「紐約的美術村」（「紐育の美術村」全1章、第417頁～第424頁、全8頁）

### 2.3 未翻訳の諸作品の篇目（11篇）

そのほか、翻訳されなかった諸作品の篇目は以下のとおりである。

- ㉑「失意と修史」（全6章、第94頁～第101頁、全8頁、1923・8・10）
- ㉒「人物月旦ということ」（全2章、第102頁～第109頁、全8頁、1922・8・9）
- ㉓「洋行の前と後と」（全1章、第196頁～第202頁、全7頁、日付なし）
- ㉔「富士山が見える」（全4章、第202頁～206頁、全5頁、1923・11・23）
- ㉕「帝都の復興」（全4章、第220頁～第232頁、全13頁、日付なし）
- ㉖「文学と政治との岐路」（全5章、第242頁～第247頁、全6頁、1924・6・30）
- ㉗「国境生活者」（全5章、第248頁～第253頁、全6頁、1924・6・30）
- ㉘「紐育より南へ」（全12章、第310頁～第340頁、全31頁、日付なし）
- ㉙「南の思い出」（全12章、第341頁～第365頁、全25頁、1923・8・26）
- ㉚「秋の軽井沢」（全8章、第366頁～第380頁、全15頁、1923・10・31）
- ㉛「北支那の初夏」（全3章、第381頁～390頁、全10頁、日付なし）

### 3. 翻訳された諸作品の4つの時期

#### 3.1 翻訳の期間（約三年間、1925年4月～1928年4月）における魯迅の思想的転折点

##### 3.1.1 1928年4月ころまでの、中国改革に関する魯迅の思想状況について

1910年代終わりころから、魯迅は旧社会、旧思想に対して、「〈社会批評〉と〈文明批評〉」（『魯迅景宋通信集』一七）、1925・4・28、『魯迅景宋通信集《兩地書的原信》』、湖南人民出版社、1984・6）を行うことを目標とし、中国の改革において国民性の改革（思想革命）を最重点の課題であると考えた。また礼教（旧社会の礼儀と道徳）を批判し、白話文を提唱し、1924年ころから青年知識人の啓蒙と育成に努めた。また1925年ころから、魯迅は女師大事件において学生側に立って援助し、校長側と対立し、北洋軍閥政府当局側と結託する校長や知識人（陳西滢等）と熾烈な論争を行った。1926年3・18惨案（虐殺事件）において、徒手空拳のデモ隊に対して北洋軍閥政府は武力による凶暴な弾圧を行った。この惨案以後、魯迅は中国変革の当面の最大の課題が、軍閥政府の権力を強力によって打倒することにあると考えを改め、国民革命に対する共鳴をいっそう深めた。国民性改革の課題は後景に退いた。その後、国民革命が順調に進展していると思われた1927年4月、上海等において、蒋介石と国民党右派によって4・12反共クーデターが行われ、左翼勢力は弾圧され虐殺された。そのとき魯迅は広州において青年を殺害するものが青年であることを目の当たりにし、進化論に基づいて中国改革を展望することの破綻を認識した。<sup>11</sup>

魯迅は、1927年10月、広州から上海に逃れ居住した。その頃、魯迅は旧社会に盤踞して変化しない旧思想、旧習慣に反対し、また南京国民政府の圧制に抵抗し、中国改革を求めるという意味において、進歩的作家であった。しかし魯迅は決して左翼思想の作家とは言えなかった。

魯迅は、上海に居住後、同年11月に、創造社の鄭伯奇等の訪問を受け、『創造週報』を復刊し共同で出版していくという提案を受けて承諾した。魯迅は創造社と協力して、旧社会、旧思想に対して批判し、中国の改革を促し、南京国民政府の圧制に抵抗していく意思であったと思われる。<sup>12</sup>

しかし魯迅が承諾した創造社との協力の計画は、創造社内部の急進的な成仿吾や若手の成員（李初梨、馮乃超等）の考えにより否定された。第三期創造社は「無産階級革命文学」を提唱する路線を選択し、魯迅との協力の約束を反故にした。1928年1月、創造社は雑誌『文化批判』第1号を創刊し、太陽社（蔣光慈、錢杏邨等）も雑誌『太陽』1月号を創刊して、「無産階級革命文学」を主張する。中国革命文学派は、魯迅、周作人等、後に茅盾等を小資産階級作家、或いは人道主義者として集中的に激しく批判した。しかも1927年11月に創造社自身が魯迅に提案した『創造週報』の復刊・協力の申し込みと魯迅の承諾に関して、鄭伯奇等はその計画を破棄することを魯迅に説明したり伝えることがなかった。

1928年1月からはじまる中国革命文学派による激しい批判を契機として、魯迅はこの批判に強く反駁しつつ、逆にマルクス主義文芸理論と本格的に接触し、その文献を翻訳し修得して、それを受容していくことになる。

### 3.1.2 翻訳の期間（約三年間、1925年4月～1928年4月）における魯迅の思想的転折点

1925年4月に「自以為是」（『京報副刊』1925年4月14日、「沾沾自喜」）を発表してから、1928年4月3日訳了までの約三年間の時期において、この翻訳に関わる魯迅の思想の、最も大きな転折点とそのほか二つの転折点を、上述の経過を踏まえて列挙すれば、次のようである。

1928年以降、魯迅は「革命文学」論争を契機にして、マルクス主義文芸理論と本格的に接触し受容していく。<sup>13</sup>その後、1932年の『『二心集』序』（1932・4・30）で、将来の社会改革の具体的展望に触れた。

「私はいつも自分自身のことを語った。どんなふうにも『壁にぶつかって』いるか、どんなふうにもカタツムリとなっていたか。まるで全世界の苦悩が一身に集中し、大衆のために難儀をしているかのようなようであった。これもまさしく中産知識階級分子の悪い性癖である。しかし以前には熟知する本来の階級を憎み、その滅亡をいささかも惜しむものではなかったが、のちにまた事実の教訓によって、新興の無産者にのみ将来がある、と考えるようになったのは間

違う。」(『二心集』序)

すなわち小論は、1928年初頭が、魯迅の文学活動を前期と後期に分期しうる時点と考え、この時点をもっと大きな転折点とする。『思想・山水・人物』(前出)の翻訳は、1928年4月3日に訳了しており、後期にわざわざ入る時点で訳了したことになる。

そのほか、魯迅の思想的転折点となったと考えられる、1926年3・18惨案、1927年4・12反共クーデターの二つの事案を入れて、『思想・山水・人物』(前出)の諸作品の翻訳時期を以下の4つの時期に分けて見ていくことにする。また、翻訳した場所が異なるため、その場所も併記する。

- (1) 時期Ⅰ 1925年4月から1926年3・18惨案以前(北京に居住)。
- (2) 時期Ⅱ 1926年3・18惨案以後、1927年4・12反共クーデター以前(1926年8月、厦門へ移る。1927年1月広州へ移る)。
- (3) 時期Ⅲ 1927年4・12反共クーデター以後、1928年1月「革命文学」論争の開始以前(1927年10月、上海に移る)。
- (4) 時期Ⅳ 1928年1月「革命文学」論争の開始以後、1928年4月3日訳了まで(上海に居住)。

## 3.2 時期Ⅰ(1925年4月から1926年3・18惨案以前)の翻訳作品(北京に居住)

### 3.2.1 この期間(時期Ⅰ)の諸作品と概要

この期間に訳出された諸作品と概要は以下のとおりである。

①「ひとりよがり」(全8章、第122頁～第133頁、全12頁、1923・8・14、「自以為是」、『京報副刊』1925年4月14日、「沾沾自喜」、魯迅訳、北京で翻訳)

作者(鶴見祐輔)は、日本の一部の青年が『源氏物語』などの古典の存在によって驕慢であり、外国の文化を学ぶ姿勢のない言動をすることに驚く。これは人類文化の発達に背反する態度である。我々は謙虚な気持ちをもって、世界の文化を惜しみなく摂取すべきである。そこから新しいものが生まれる。

②「空しき篤学」(全2章、第110頁～第115頁、全6頁、1923・10・12、「徒



然的篤学』、『京報副刊』1925年4月25日、魯迅訳、北京で翻訳)

リンカーンのように、読書によって自らの見識と人間性を成長させた人もいる。しかし英国の歴史家アクトン卿のように、大量の読書による無尽蔵の知識をもち、博学を称されながら、政治家としても学者としても、なんら見るべき功績を残さなかった人もいる。アクトン卿のわずかに残された講義録4巻にも、創意が見られず、モーレー卿は彼に創造力が欠けていたことが分かると評する。

③「北京の魅力」(全6章、<sup>14</sup> 第391頁～第411頁、全21頁、1922・8・8、「北京の魅力」、『民衆週刊』第26期～29期、1925年6月30日～7月21日、魯迅訳、北京で翻訳)

瀋陽から30時間の汽車旅行ののち、北京城内に到着する。その頑丈な城壁の姿は中国を象徴する。なに人も故宮の大和門前の広庭に息を呑む。中国人の生活を凝視すると、その大きさと深さを実感する。アメリカ人の独身の友人が、中国政府の顧問となり、骨董を集め、中国人の悠久の伝統的生活美におぼれて暮らすようになった。中国人のゆったりした気持ちが、北京に住む外国人の性急を征服する。また、当代の学者呉闔先生ごかいの若い息女の教養ある詩文に接する。

### 3.2.2 時期Ⅰの翻訳の主たる意図、「〈社会批評〉と〈文明批評〉」

1925年4月から1926年3・18惨案以前のこの時期において、魯迅は、国民性の改革（思想革命）を中国改革の中心課題として考えた。魯迅は旧社会、旧思想に対して、「〈社会批評〉と〈文明批評〉」（前出）を行った。

魯迅は、「看鏡有感」（1925・2・9、『墳』所収）で次のように述べる。漢代の銅鏡は海外の文物の姿をのびやかに図案に採り入れていた。唐代の絵画、墓前の石像等には海外の文物が描かれたり採り入れられていたりしている。漢唐の人々は、異民族の奴隷とならない自信があり、或いはそのようなことを考えてみたこともなく、外来のものを受け入れ、自由に駆使した。しかし国力の衰えた朝代では、国粹に退避する。<sup>15</sup> これは、「ひとりよがり」（前出）における日本の青年の、内に閉じこもる消極性と傲慢さに対する鶴見祐輔の批判

の考えと共鳴するところのある内容であり、中国の国民性の改革に通ずる内容であった。<sup>16</sup>

また、文学革命以後の1920年代初め前後から、胡適は「整理国故」（「新思潮の意義」、1919・11・1、『胡適文存一集』所収）を唱え、またこのころ、学者や学生が研究室に入るべきことを論じた。こうしたことを踏まえ、のちに魯迅は『『書齋生活与其危険』記者附記』（1927・6・1、半月刊『莽原』第2巻第12期、1927・6・25、広州にて執筆）で次のように言う。

「数年前、中国の学者たちに或る運動があり、それは青年たちを書齋にこもらせようとした。私は当時少し異議があった。その考えは青年が書齋に入ったあと、実社会・実生活と離れてしまい、書物ばかりとなることを心配したのにすぎない——いいかげんなばかや、勇敢なばかではない。思いがけないことに私は、今日まで〈思想が過激〉の罪名を負っている。そして実社会・実生活に対して言動のある青年は、ひどいときには思わぬ災禍に遭った〔ここでは1927年4・12反共クーデターを指すと思われる〕。この篇を訳し終わって、遙かに日本の言論の自由を思い、まことに『思わず感慨に堪えない。』<sup>17</sup>

1920年代初めころ、胡適等の勧めに従って、中国の青年が現実の社会・生活と隔絶し、書齋にこもって死書（中国の古典書籍）に埋没することを、魯迅は批判した。それは、「空しき篤学」（前出）のアクトン卿のような学者を、中国で育てることになることを憂慮したためでもあると思われる。

また魯迅は、「灯下漫筆」（1925・4・29、『墳』所収）で次のように言う。「鶴見祐輔氏は『北京の魅力』の中で記している。或る白人が<sup>18</sup>中国に行くことになり、予定の暫定居住期間は1年であった。しかし5年後、彼はまだ北京におり、しかも帰りたくないと思うようになっていた。或る日、彼ら二人は一緒に晩ご飯を食べる。

『圓いマホガニーの食卓について、山海の珍品を代る代る給仕させ乍ら、話は骨董のこと、絵のこと、政治のことにはずむ。電灯には支那風のかさをかぶせて、淡い光が一杯骨董の陳んだ部屋に流れている。無産階級だの、プロレタリアなんてことは、どこを風が吹くという具合である。

そして自分は、支那の生活の空気中に陶醉し乍ら、外国人に対して有する

〈魅力〉と言うものについて、深く考えた。元も支那を征服して、漢人種の生活美に征服せられた。清も支那を征伐して漢人種の生活美に征服された。そして、今西洋人が同じように、デモクラシーとか何とか言い乍ら、支那人の六千年かかって築き上げた生活の美しさに魅せられて居る。』

（中略）西洋人ははじめて中国に入ったとき、蛮夷と称せられ、誰もが自然と眉をひそめることになった。しかし、現在は時期が至り、我々がかつて北魏に献じ、金に献じ、元に献じ、清に献じた盛宴を、彼らに献ずるときになった。（中略）古人はかつて女性をもって目先の安逸の砦とし、その名を美化し自己を欺き〈和親〉と言った。今人はやはり女性、玉、帛を用いて奴隷となる贈り物とし、またその名を美化して〈同化〉と言う。だからもしも外国の誰かが、すでに宴席にいく資格のある現在になって、なお我々のために中国の現状を呪詛する者がいるならば、これこそ本当に良心のある尊敬すべき人である。」（「灯下漫筆」）

鶴見祐輔は、或るアメリカ人が中国の政府の顧問となり、北京で支配階級の一員としての生活を享受し、中国の骨董を集め、伝統的中国の生活に埋没し享受するようになったことを記す。このことに対して、魯迅は上のように評し、<sup>19</sup> さらに次のように述べる。

「この文明は、外国人を陶醉させたばかりではなく、またつとに中国のあらゆる人々を陶醉させずにはおかず、しかも笑いを浮かべさせるほどである。というも古代から伝来し、今にいたるまで存続する多くの差別は、人々をそれぞれに分断し、ついに再びほかの人の苦しみを感ずることをできなくさせたからである。そして自分がそれぞれほかの人を奴隷として使い、ほかの人を食う希望をもっていることにより、自分にも奴隷として使われ食われる将来が同じようであることを忘却する。そこで大小無数の人肉の饗宴は、文明が存在して以来現在にいたるまでならべられ、人々はこの会場で人を食い、食われ、凶暴な者の愚昧な歓呼によって、弱者の悲惨な叫び声を覆い隠した。女性や子どものことはさらに言うまでもない。

この人肉の饗宴は現在もならべられてあり、多くの人がならべ続けたいと考えている。人を食うこれらの者を一掃し、この宴席をすっかりかたづけ、

この台所を打ち壊すことが、すなわち現在の青年の使命である。」(「灯下漫筆」)

「灯下漫筆」(前出)の上記の社会批判は、「北京の魅力」を魯迅が読み翻訳し、それを契機に思索した結果を含む文章であると思われる。鶴見祐輔の「北京の魅力」は中国の「社会批判」と「文明批判」に昇級する刺激・内容をもつものとして魯迅に裨益するところがあった。

魯迅は、『『思想・山水・人物』題記』(1928・3・31、前出、末尾に「魯迅于上海寓樓訳畢記」とある)で次のように言う。

「二三年前、私がこの雑文集から『北京の魅力』を訳したとき、決して続けて訳していき、積み重ねて一冊の本をなそうとは思わなかった。文章を作りたくない、或いは作ることができないが、しかし文章を作らなければならないたびにごとに、私はこれまでいささかの訳文を用いて、責任をふさいだ。そして訳者と読者が骨を折ることのない文章を選ぶことを好んだ。この一篇はそれにならなっていた。気分よく書きつづけ、いささかの難解さもなく、しかしまたはっきりと中国の姿を見ることができ。私の所有する本は非常に少なく、のちにはやはりこの中から幾篇も選んだ。それはたいてい思想と文芸に関するものであった。」

上記の内容は、恐らく魯迅が『思想・山水・人物』(前出)を訳した、基本的な当初の理由と心情であったと思われる。すなわちこれをとおして、「はっきりと中国の姿」を見ることができると内容であったと思われる。<sup>20</sup> しかしその後、中国の状況の変化、魯迅自身の思想的変化とともに、訳出の理由にも若干の変化が起きたと思われる。

### 3.3 時期Ⅱ(1926年3・18惨案以後、1927年4・12反共クーデター以前)の翻訳作品(1926年8月、北京から廈門へ移る。1927年1月廣州へ移る)

#### 3.3.1 この期間(時期Ⅱ)に訳出された諸作品と概要

この期間に訳出された諸作品と概要は以下のとおりである。

- ④「懷疑主義者ということ」(全3章、第236頁～第242頁、全7頁、1924・

6・30、「所謂懷疑主義者」、1926・7・10訳、週刊『莽原』第14期、1926・7・25、魯迅訳、北京にて翻訳)

アナトール・フランスは次のように言う。懷疑主義者は人間の知と意を束縛するものに対して攻撃し、人間を愚昧にする無知と、抑圧する偏見、専制する不寛容、拷問する残酷、殺戮する憎悪に対して、さまざまに戦う者である、と。信ずべき理由のない事物を疑うのが、真の強さであり、懷疑主義者である。モーレー卿、アナトール・フランス等は、従来の伝統と形式を信ぜず、自分一人の道を歩いていった懷疑主義者である。

⑤「ユーモアに就て」（全9章、第259頁～第273頁、全15頁、1924・7・3、「説幽默」、1926・12・7訳、半月刊『莽原』第2巻第1期、1927・1・10、魯迅訳、厦門にて翻訳、「説幽默」訳者識）（1926・12・7、半月刊『莽原』第2巻第1期、1927・1・10）

「ユーモア」とは日本語に訳すのが難しく、その意味を理解するのも難しい。現実世界を正視すれば、悲惨な世界である。この悲惨さを二六時中意識して生活することはできない。人はそのために笑ってすまそうとする。ジョン・スチュアート・ミルの言葉に「専制政治は人間を皮肉にす」というのがある。専制治下で、正直な人間は腹が立って暮らせない。正直な人は殉教者となって殺される。正直でない人は、人生を馬鹿にして、ユーモアに隠れて、皮肉に笑って暮らす。このユーモアを皮肉にしない最大の要素は、同情である。

### 3.3.2 時期Ⅱにおける主たる翻訳の意図、「専制政治は人間を皮肉にす」

1926年3・18惨案において、北洋軍閥政府の警備隊は徒手空拳のデモ隊に対して、発砲弾圧し、200名前後の死傷者を出した。魯迅の教え子、北京女師大の学生も死亡した。北洋軍閥政府の暴挙と、それと結託した一部知識人の言論に対する魯迅の憎悪は激しかった。<sup>21</sup> 魯迅は、この事件を契機に、北洋軍閥政府の権力を強力によって打倒することが、中国変革の優先的課題であると考えようになった。国民性の改革（思想革命）の課題は後景に退いた。「懷疑主義者ということ」（前出、1926・7・10訳）において描かれた、専制

の不寛容等に対して戦う懷疑主義者の強い生き方は、魯迅が共鳴できる内容であったと思われる。<sup>22</sup>

また、ジョン・スチュアート・ミルの言葉、「専制政治は人間を皮肉にす」は、『思想・山水・人物』において3度引用された。それ以後、魯迅は自分の作品中に合計3度引用している。(1)「約翰弥耳説：専制使人們變成冷嘲。我們却天下太平，連冷嘲也沒有。我想：暴君的專制使人們變成冷嘲，愚民的專制使人們變成死相。」(「忽然想到 五」、1925・4・14、『華蓋集』)、(2)「約翰穆勒説：專制使人們變成冷嘲。／而他竟不知道共和使人們變成沈默。」(「小雜感」、1927・9・24、週刊『語絲』第4卷第1期、1927・12・17、『而已集』)、(3)「“專制使人們變成冷嘲”」(「蕭伯納在上海」序)、1933・2・28、『南腔北調集』)

魯迅は、1925年5月30日付け書簡で自らの思想的経歴をふり返り、許広平に次のように語った。これまでの自分の思想は、「〈人道主義〉と〈個人的無治主義〉という二つの思想の起伏消長であるのかも知れません。」(『魯迅景宋通信集』二四) 魯迅の「個人的無治主義」には二側面あり、それは無政府的厭世的「個人主義」と「虚無的」「個人主義」であると思われる。<sup>23</sup>「虚無的」「個人主義」という一側面の態度には、むしろ社会問題から遠ざかり、自分なりの幸福を追求したいという、改革に対して後ろ向きな姿勢があり、ミルの言う、専制治下の皮肉な生き方にも通ずるところがあったと思われる。

「ユーモアに就て」(前出、1926・12・7訳)の翻訳は、1927年1月に広州に行き、その後、再び現実の闘争に参加することになる直前の、1926年12月、厦門での翻訳である。自分の生き方の一側面(「虚無的」「個人主義」の態度)を克服する時期の翻訳で、これを顧みる意味も「ユーモアに就て」の翻訳に含まれていたと推測する。<sup>24</sup>

### 3.4 時期Ⅲ(1927年4・12反共クーデター以後、1928年1月「革命文学」

論争の開始以前)の翻訳作品(1927年10月、広州から上海に行く)

#### 3.4.1 この期間(時期Ⅲ)に訳出された諸作品と概要

この期間に訳出された諸作品と概要は以下のとおりである。

⑥「読む文章と聴く文章」（全3章、第232頁～第236頁、全5頁、1924・6・30、「読的文章和听的文字」、1927・5・31訳、半月刊『莽原』第2巻第13期、1927・7・10、魯迅訳、広州にて翻訳）

アナトール・フランスは次のように言う。モリエールの戯曲は悪文と言われるが、彼は読む人を対象にしたのではなく、聴衆を対象にして耳で聴く文章を作った。彼はまた音律に深い注意を払った。それは読む文章とは違う、と。演説をする雄弁家には、良い音声と良い楽耳が必要である。

⑦「書齋生活とその危険」（全3章、第134頁～第143頁、全10頁、日付なし、「書齋生活与其危険」、1927・6・1訳、半月刊『莽原』第2巻第12期、1927・6・25、魯迅訳、広州にて翻訳、「『書齋生活与其危険』訳者附記」、1927・6・1、半月刊『莽原』第2巻第12期、1927・6・25）

深く内省する書齋人にとっては、大声の国家論や修身講話が道化芝居〔原文は呆氣的把戲〕のように思われる。「専制主義は、人間を皮肉にする」とミルは言った。専制治下の民には言論・行動の自由がない。専制を矯正しようとすれば命が危ない。強い人間は反抗して殺害される。普通の間人はあきらめ、人中では冗談を言って笑い、書齋に一人独居するときには憤慨する。また書齋生活者は実社会と隔絶しがちであり、独りよがりになることが多い。そうならないために、実社会や世評に触れる必要がある。

⑧「専門外の仕事」（全11章、第80頁～第94頁、全15頁、1923・8・1、「専門以外の工作」、1927・6・21訳、週刊『語絲』第142、143期、1927・7・31、8・6、魯迅訳、広州にて翻訳）

しばしば思想と実生活の乖離することが見受けられる。専制政治の国においては、思索は実行と関係がないというあきらめの下に行われ、思想は実生活と縁遠くなり、知的遊戯と化してしまう。ミルが「専制政治は人間を皮肉にす」といったのはこの理由である。そのほか、乖離の原因は思想が専門家の仕事となったためである。しかし歴史上、偉大な新発見、新思想は専門家から出てきたのではない。例えば自分の職業をもちながら、そのほかの学問に貢献した人に、ミルとマシュー・アーノルドがいる。しかしアーノルドは教育家であり、自分の説を傾聴するのはいつも青年たちであり、彼は自己批

判の力を失い、独断的である欠点があった。

⑨「善政と悪政」（全1章、第257頁～第259頁、全3頁、1924・7・3、「善政和悪政」、1927・6・27以前訳了、週刊『北新』第39、40期合刊、1927・7・15、魯迅訳、広州にて翻訳）

文学と文学者に対する評価は、社会の政治問題と無関係ではあり得ない。シェークスピアの戯曲が英国王朝を転覆する思想を表現していたならば、その戯曲は今日まで残存できなかつたであろう。アナトール・フランスは言う、いわゆる善政とは味方の政治で、悪政とは敵方の政治である、と。

⑩「人生の転向」（全1章、第115頁～第121頁、全7頁、1923・8・14、「人生的転向」、1927・6・27以前訳了、週刊『北新』第41、42期合巻、1927・8・5、8・12、魯迅訳、広州にて翻訳）

米国の或る作家が自らの人生の転換を、作者（鶴見祐輔）に語る。彼はハーヴァード大学の法律科を苦学して新聞記者となったが、記事の署名は許されず、安月給のため暮らしていけなかつた。或る日、何気なく短篇小説1篇を書いて雑誌社に送ったところ、作品が採用され、1ヶ月分の給料に相当する報酬が与えられた。そのために彼は新聞社を辞め、小説を書くようになり、現在、たいして不自由なく暮らせるようになった。しかし彼は、営利主義の動機から書く小説は邪道である、大作が出るはずがない、それは本当の創作欲の衝動ではないから、と言う。

⑪「閑談」（全1章、254頁～第256頁、全3頁、1924・6・30、「閑談」、1927・6・27以前訳了、週刊『北新』第43、44期合巻、1927・8・17、8・25、魯迅訳、広州にて翻訳）

1923年に物故したモーレー卿の逸話が語られる。アイルランド問題で苦しみぬいていたモーレー卿は、ロンドンから来た友人と閑談して慰藉を得て、一時、政治上の重荷を肩から下ろすことができた、そのありがたさをのべる。この随想「閑談」は、こうした閑談の効能を紹介する。

⑫「断想」（全27章、<sup>25</sup>第1頁～第79頁、全78頁、「1924年2月より3月記」、「断想」、1927・6・27以前訳了、第1節～第7節、週刊『北新』第45～52期、1927・9・2～10・20、第8節～27節、半月刊『北新』第2巻第1～5期、1927・



11・1～1928・1・1、魯迅訳、広州にて翻訳)

前半部分の論点の一つは、英国政治史の人を惹きつけるものが、フェア・プレーの精神であるとする話題である。英国社会に根づくその精神のゆえに、英国政治史には卑怯を許さないような人間的偉大さが現れている。世界の歴史は平和な農耕民族が剽悍な遊牧民族に征服された歴史である。しかし英国は島国のため残忍な征服を免れた。英国は国内政治において自由な政治を布いて発展した。専制政治は、国民努力の総和である国家が、国民の自由を圧迫するものであり、それゆえ専制政治の下で国家の繁栄すべき道理がない。（「4. ギズレリー」、「5. フェアプレー」等）

前半部分のもう一つの論点は、アメリカ大統領ウィルソンをめぐる話題である。ウィルソンはユーモアを愛し、また「アメリカ主義」が希望と自信に満ちた精神であって、楽天的なほど進歩的であると説明した。ウィルソンは民主主義を信じ、この世界を支配しているのは平凡人であるとした。彼は大事な決断をするとき、自分の中にあるアメリカ人、アメリカの平民と自問自答して決定するとした。英国のマシュー・アーノルドやモーレー卿と、ウィルソンを比較すると、ウィルソンは米国南部出身の明るい南国人であったとする。ウィルソンの死ののち、現在のアメリカは農民の窮状化と工業化という新しい時代に直面している。（「8. ウィルソンの死」、「14. 明るい南国児」等）

後半部分の論点は、1924年、英国労働党内閣が出現したことをめぐる話題である。労働党内閣の出現は、はじめて2名の労働者議員を議会に送ってから50年目のことであった。この息の長さは、英国国民が中庸という性格をもち、病的な極端な行為・思想を受け入れないことからくる。また労働党内閣の出現は、労働党の頭脳となったフェビアン協会の40年の努力の結果でもあった。フェビアン協会は1883年無名の青年の集会からはじまり、若いシドニー・ウェップ夫妻の入会、バーナード・ショウ等の入会があり、その後フェビアン協会は、精神的昏迷にあった英国青年層の思想的追究、社会問題の探究の中心となった。40年間、彼らはねばり強く改革の道を漸進した。作者（鶴見祐輔）は、ロンドンで出会った労働党の思想家・活動家の中の一人、

トーナーを思い出す。トーナーは無私の気持ちで労働党の政治活動に奉仕する。作者（鶴見祐輔）は英国の政治思想が、政治は利権ではなく奉仕であるとする方向に転換しつつあることを言う。（「21. フェビアン協会生る」、「22. シドニー・ウェップ」、「23. バーナード・ショウ」、「27. 政治は利権より奉仕に」等）

### 3.4.2 時期Ⅲの状況における翻訳の意図

国民革命が進展すると見える中で、1927年4・12反共クーデターが上海で行われ（広州には、4月15日に波及）、蒋介石と国民党右派は左翼勢力に対して過酷な弾圧と虐殺を行った。4月18日、南京国民政府が樹立され、7月に武漢国民政府が崩壊して、国民革命は挫折する。広東において、クーデターで殺害された左翼関係者は2100余名、中山大学の学生も40余名逮捕された。魯迅は中山大学学生の逮捕に抗議し、4月21日、中山大学の一切の職務を辞し、<sup>26</sup> 自宅に引きこもった蟄居状態になる。6月6日、魯迅の辞職が中山大学に認められた。この時期に翻訳された作品は、自宅に蟄居状態の中で翻訳された。<sup>27</sup>

4・12反共クーデターについて、魯迅がどのような衝撃を受けたかについて、『回憶魯迅』（馮雪峰、人民文学出版社、1952・8、底本は『魯迅卷』第8編〈中国現代文学社編〉）は、1929年前半における魯迅の回顧の発言を次のように記す。

「『もしも、〈革命〉の広州でもあのような殺戮がありうることを予測できたか、と問う人がいるなら、私は率直に言う、まったく思いもよらなかった、と。私も〈美しい夢〉を抱いて広州に行ったことはしばらく言うまい。そこでは、まだ〈合作〉のときで、私はこの目でそうした顔つきを見たし、そうした誓いの言葉を聞いた。私が世故にたけていると言うのなら、あらゆる世故は役に立たないだろう。……まだあまりにもまじめで、〈芝居をする虚無党〔原文は做戲的虚無党〕〉を信じすぎ、大きなペテンにかかってしまった……私はついに驚きのあまり呆然とした……血の代償によって、得た教訓はこのペテンを理解したことだけだ。』」

また、当時、魯迅を訪問した山上正義は、「魯迅を語る——北支那の白話文学運動——」（『新潮』第25巻第3号、1928・3）で次のように述べる。

「私は本年〔1927年〕夏、広東郊外白雲路の隠遁所に氏が漢魏叢書、唐宋詩文等の堆積の中に埋れ乍ら細いレクラム版の独逸ものの短篇を、毛筆で楷書を以ってコツコツとして翻訳されている姿を見たことがあった。」（100頁）

「三月〔1927年〕頃だった。広東に居る創造社系の作家評論家達が『世界の文学者に訴う』という宣言書を発表したことがあった。<sup>28</sup> 日本の『文芸戦線』にも訳載された様だが、極めて平凡な、何の激烈な文句も、危険な意味も含まれていなかった。しかし四月十五日、李濟琛〔李濟深の原名〕なる新軍閥が一度その本性を明らかにして清党運動の名を籍ってクーデターを断行するや、此の『世界の文学者に訴う』の宣言書署名者連も余りに当然のことの如く、クーデターの対象とされた。（中略）

慰むる言葉も見出せず私とその潜匿の一民屋の二階に魯迅と相對していると、恰度其の窓から見える大通りを一隊の工会の糾察隊が工会旗、糾察隊旗をたて、喇叭を吹いて通って行った。

窓先の電柱には清党の標語が無数に貼られてあった。『打倒武漢政府』『擁護南京政府』『国賊中国共産党』……等。そして其の新しいポスターの下には未だ数日前迄鮮かに貼られた『聯共容共是總理之遺囑』『打倒新軍閥蒋介石』等の全然反対な意味のものが、十分に剥き去られないで残ってさえ居た。

魯迅は工会糾察隊の通り過ぎるのを見て言った。『よくも恥しくもないものだ。昨日迄は共産主義万歳を叫んだものが、今日は共産主義系の工人を搜索して廻っています』そう言われていると、なるほどそれは右派の工会工人で公安局の手先きとして左派工人の逮捕搜索に従事している一隊であった。

魯迅の評語には唯冷い、暗い、絶望に近いものしか感ぜられなかった。」（101頁～102頁）<sup>29</sup>

上述のような環境と魯迅の心情の中で、「断想」等は翻訳された。「断想」は、英国の政治史の中にフェア・プレーの精神が深く存在しえたこと、また、米国の政治の中で、ウィルソンの理想主義が国民の支持を得ることができた

ことが語られた。それは、当時、4・12反共クーデター直後の中国の社会的政治的状況と対比すると、白黒を逆転させたような、中国の現実の陰画のように思われる。国民党（右派）は国民革命の進行する中では共産主義を擁護し（「連ソ容共」の政策）、青年学生を左翼思想へと積極的に誘導した。しかし4・12反共クーデターの中で、国民党右派は逆に左翼思想に傾いた青年学生を左翼勢力として逮捕処刑した。魯迅はそれを蒋介石等の国民党右派の政治的「大きなペテン」と受けとったと思われる。他方、鶴見祐輔は英国政治史の中のフェア・プレーの精神の存在を紹介する。こうした4・12反共クーデターの状況を背景として考えた場合、「断想」は、白黒を逆転させた現実の陰画として、諷刺的に作用することを意図された翻訳であったと推測する。英米の自由主義的政治家の紹介は、左翼を弾圧する南京国民政府側から言えば、それをとがめることが難しかったと思われる。魯迅の側から言えば、南京国民政府の行う圧制とは正反対に異なる、政治的な思想・姿勢・運営の在り方を示すことよって、批判の意味を含ませることができた。また、自由主義思想、自由主義者の紹介は、魯迅が左翼として弾圧されるのを避けるための煙幕ともなったと思われる。

同時に、米国のウィルソン、英国労働党の支持者トーナー（R.H. Tawney）の存在は、中国にも存在した孫文のような理想主義的な革命的政治家、中山大学学生畢磊ひつらいのような中国変革のための純真な奉仕者を、心秘かに魯迅の内面によびおこし、<sup>30</sup> 哀悼する心情がこめられていたと推量する。

このように陰画として諷刺的に作用する一つの意図を含んで、すなわち蒋介石等の国民党右派の「大きなペテン」に対する倫理的抗議としても上記の「断想」は選択されて翻訳されたと推測する。

また、『思想・山水・人物』（前出）の翻訳とは関係がないけれども、この同じ時期に行われた魯迅の講演に、「魏晋風度及文章与薬及酒之関係」（1927・7・23、26講演〈邱桂英、羅西記〉、広州『民国日報』副刊『現代青年』第173期～第178期、1927・8・11～17、のち改訂して、半月刊『北新』第2巻第2号、1927・11・16、『而已集』所収）がある。この講演は、広州市教育局の主催する広州夏期学術講演会の講師を魯迅が依頼されて行われたもので、当局

による踏み絵の意味があった。この講演は、魏晋の時代の、政治権力が頻繁に交代する時期における、士大夫・知識人の生き方、思想を紹介したものである。

「嵇康、阮籍げんせきの罪名は、これまで彼らが礼教を破壊したのだと言われている。しかし私個人の意見によりますと、この判断は誤りです。魏晋の時代に、礼教を信奉した者は見たところ大変立派なようですが、しかし実際は礼教を破壊し、礼教を信じていない者です。表面上、礼教を破壊した者は、実はむしろ礼教を承認し、余りにも礼教を信じすぎたのです。なぜなら魏晋の時のゆる礼教を信奉するとは、それによって自分の利益を図ることで、その信奉もたまたまの信奉にすぎません。例えば曹操は孔融を殺し、司馬懿しばいは嵇康を殺しました、それはみな彼らが不孝と関係があるためです。しかし実際曹操、司馬懿が有名な孝子であったでしょうか。この名義によって、自分に反対する人に罪をかぶせたにすぎません。それでまじめな人は、このような利用が礼教を冒瀆していると思い、不平を極めますが、なすすべもなく、憤激して礼教を語らず、礼教を信ぜず、はなはだしくは礼教に反対するようになります。しかし実は外面の態度にすぎず、彼らの本心については、恐らくむしろ礼教を信じ、宝と見なしていたので、曹操や司馬懿たちと較べるとずいぶん迂遠で頑固です。」

この講演は、中国古典に関する魯迅の博識と創見に満ちたもので、聴衆を煙に巻き、魯迅に対する当局側の猜疑心を鎮めた。<sup>31</sup> しかしその内容は、魏晋の時代を背景（スクリーン）として、南京国民政府の支配する中国の現実をある程度に投影した影絵であったと思われる。「三民主義」を信じた人たちが、むしろ裏切られ、殺害され、「三民主義」を掲げた蒋介石等の国民党右派は、それを利用して、左翼勢力をだまし討ちのように弾圧し虐殺して権力を掌握した。この講演は、魯迅が国民党右派に対する批判の思いを秘かにこめて、魏晋の時代を背景として映しだされる現実の影絵として語られたと思われる。1929年、つとになされた林玉堂（林語堂）の指摘のように、<sup>32</sup> この講演は、4・12反共クーデター以来、蒋介石と国民党右派によって行われた、左翼人士・学生の虐殺、人権蹂躪、言論抑圧等の過酷な圧制に対する、魯迅

の抗議の意思を秘めたものであったと思われる。この抗議の意思は、林玉堂の指摘する魯迅の隠された「要点」であり、当局が察知できなかった「要点」であったと思われる。

魯迅は中山大学学生の逮捕に抗議し辞職し、また1927年4月1日の「宣言」を疑われて、生命の危険の中にあった。魯迅は、これらの二つの形式（陰画と影絵の形式）によって主として倫理的側面から、政治的姿勢の側面から、蒋介石と国民党右派の政治的「大きなペテン」に対する抗議の意思を、当局に察知されない形式で示したと思われる。倫理的そして政治的姿勢の側面と言うのは、魯迅が、4・12反共クーデターの当初、それを社会科学的政治理論的に十分には分析し理解していなかったと思われるからである。

「私は1927年、血によって驚かされて呆然となり、広東を離れました。口ごもり、まっすぐに言う度胸のなかったそれらの言葉は、すべて『而已集』に載っています。」（『三閑集』序言）、1932・4・24）

それゆえに、4・12反共クーデターに対する魯迅の直後の反応は、主として倫理的そして政治的姿勢の側面からの反応であり、蒋介石等の国民党右派の「大きなペテン」による、左翼勢力に対する弾圧、虐殺、その残酷な手口に対する非難の気持ちであった。4・12反共クーデターの社会科学的政治理論的意味をより深く理解できたのは、1928年以降、マルクス主義文芸理論と本格的に接触して受容していき、それを把握しつつあった1929年ころのことと思われる。<sup>33</sup>

そのほか、「善政と悪政」（前出）で鶴見祐輔は、「文学者の声名も亦、全然その社会の政治問題と無関係ではあり得ない。」とする。文学者の評価は、その思想と文章にだけよるものではない。魯迅は、「魏晋風度及文章与葉及酒之關係」（1927・7・23、26講演）で次のように言う。「たとえ過去の人であっても、その詩文がまったく政治を超越したいわゆる〈田園詩人〉、〈山林詩人〉はいません。人間の世の中をまったく超越する者も、いません。世の中を超越する以上、当然詩文もありません。」

## 注

<sup>1</sup> 私が目をとおした小論の主題に関する論文等、参考とした文献等は次のものとどまる。以下適宜に、小論の中で具体的に言及することにする。

〔中国語参考文献〕

- ① 「魯迅」、林玉堂著、光落訳、『北新』第3巻第1期、1929・1・1、底本は『魯迅回憶録：散篇（上册）』、魯迅博物館等選編、北京出版社、1999・1
- ② 『魯迅手蹟和蔵書目録3（内部資料）』、北京魯迅博物館編、1959・7
- ③ 「回憶中山大学〈緊急会議〉情況」、周鼎培、1962、『魯迅研究資料』第3輯、文物出版社、1979・2、内部資料
- ④ 「回憶魯迅在中山大学情況」、何思源、1975・12広州魯迅紀念館訪問記録、『魯迅研究資料』第3輯、文物出版社、1979・2、内部資料
- ⑤ 「对于何思源回憶材料的意見」、黃巽、1976・5・21、『魯迅研究資料』第3輯、文物出版社、1979・2、内部資料
- ⑥ 「回憶魯迅1927年在広州的情況」、徐彬如、『魯迅回憶録』1集、上海文芸出版社、1978・1、底本は『魯迅回憶録：散篇（上册）』、魯迅博物館等選編、北京出版社、1999・1
- ⑦ 「光明的探索」、歐陽山、『人民文学』1979年第2期、1979・2・20
- ⑧ 「回憶魯迅在広州的一些事迹和談話」、何春才、『魯迅研究資料』第3輯、文物出版社、1979・2、内部資料
- ⑨ 『魯迅著訳系年目録』、上海魯迅紀念館編、上海文芸出版社、1981・8
- ⑩ 「魯迅与鶴見祐輔の『思想・山水・人物』」、隴夫、『揚州師院学報（社会科学版）』1985年第3期
- ⑪ 「回憶魯迅在広州市立師範学校講『魏晋風度及文章与薬及酒之關係』」、歐陽濟、『魯迅研究資料（15）』、天津人民出版社、1986・4
- ⑫ 「〈相得〉与〈疏離〉——林語堂与魯迅的交往史実及文化思考」、陳漱渝、『漢学研究』第13巻第1期、1995・6、底本は『魯迅論争集（上）』、中国科学出版社、1998・9
- ⑬ 「魯迅对鶴見祐輔『思想・山水・人物』的翻譯」、王彬彬、原載『天津社会科学』2008年第3期、底本は、『十年論魯迅——魯迅研究論文選（2000-2010）』、南京大学出版社、2015・7
- ⑭ 「『思想・山水・人物』」、顧鈞、『魯迅翻譯研究』、福建教育出版社、2009・4
- ⑮ 「第14章 日本文学翻譯（三）：『思想・山水・人物』及其他詮釈」、王家平、『魯迅訳文全集』翻譯狀況与文本研究』、社会科学文献出版社、2018・5
- ⑯ 「第28章 思想啓蒙——改造国民性：訳作与創作思想命題対観」、王家平、『魯迅訳文全集』翻譯狀況与文本研究』、社会科学文献出版社、2018・5
- ⑰ 「魯迅所訳之『所謂懷疑主義者』」、李浩、『上海魯迅研究・魯迅与翻譯（総第82輯）』、2019・6

〔日本語参考文献〕

- ① 「解説」、増田渉、『魯迅選集』第7巻、岩波書店、1956・9・22
- ② 『中国現代政治史』、池田誠、法律文化社、1962・10・1
- ③ 「ヨーロッパ帝国主義の成立」、河合秀和、『岩波講座 世界歴史22』、岩波書店、1969・8・18

- ④「虚偽憎悪の心眼」、林田慎之助、『魯迅のなかの古典』、創文社、1981・2・20
- ⑤『魯迅目録書目 日本書之部』、中島長文編刊、1986・3・25
- ⑥『ある中国特派員——山上正義と魯迅』、丸山昇、田畑書店、1997・6・15
- ⑦『中国国民革命——戦間期東アジアの地殻変動』、栃木利夫・坂野良吉、法政大学出版局、1997・12・18
- ⑧『中国国民革命政治過程の研究』、坂野良吉、校倉書房、2004・3・15
- ⑨『自由主義とイギリス帝国——スミスの時代からイラク戦争まで——』、竹内幸雄、ミネルヴァ書房、2011・2・28
- ⑩「第二部 工業化の時代」、『イギリス近代史 [改訂版]——宗教改革から現代まで——』、村岡健次、川北稔編著、ミネルヴァ書房、2011・10・30、改訂版第4刷
- ⑪『物語 イギリスの歴史 (下)』、君塚直隆、中央公論新社、2015・12・25第4刷

<sup>2</sup> 日本語の底本は、『思想・山水・人物』（鶴見祐輔、大日本雄辯会、大正13年12月28日〈28日の日付は8の部分に貼りつけて修正した跡がある〉、初版）の複印を使用する。ただし、名古屋市立鶴舞中央図書館所蔵の『思想・山水・人物』（鶴見祐輔、大日本雄辯会、大正13年12月20日、初版）と初版の日付が異なる。なお、鶴舞中央図書館所蔵の『思想・山水・人物』（鶴見祐輔著、大日本雄辯会、大正13年12月15日、第3版）によれば、目次、頁数、行数等が初版と一致し、内容は改変がない。しかし第三版の発行の方が日付が早くなっている。

『思想・山水・人物』（鶴見祐輔、大日本雄辯会、大正13年12月20日、初版）の挿絵は、「瞑想に耽るウィルソン」（1頁）、「和蘭陀の娘」（160頁）、「米国土人の幼児」（341頁）の3幅である。他方、『思想・山水・人物』（魯迅訳、北新書局、1928・5、北海道大学図書館所蔵本）によれば、挿絵はすべて入れ替えられ、以下のとおり9幅である（挿絵の目次による。〈〉内は挿絵下の文字。挿絵の幅数、内容については、『魯迅訳文全集』第3巻〈福建教育出版社、2008・3〉も北新書局の原本と同じ）。「著者在美国霍特生河畔〈著者在美洲霍特生湖畔〉」（首頁）、「渥特羅・威爾遜照像〈Woodrow Wilson〉」（18頁）、「瓦勒泰・培約德画像〈Walter Bagehot〉」（40頁）、「馬太・亞諾德照像〈Matthew Arnold〉」（86頁）、「克理曼沙、魯意・喬治及威爾遜〈Lloyd George, Clemenceau, and Wilson〉」（120頁）、「美国米希錫比河的風景〈米希錫比河風景〉」（150頁）、「亞那托爾・法蘭斯照像〈Anatole France〉」（196頁）、「比利時滑鉄盧的紀念塔〈滑鉄盧的紀念塔〉」（240頁）、「中国北京城和駱駝〈目次と同じ〉」（260頁）。この結果、翻訳本の挿絵は文章の内容にあったものとなっている。なお、「著者在美国霍特生河畔〈著者在美洲霍特生湖畔〉」（首頁）の写真は、『北米遊説記 附米国山莊記』（鶴見祐輔、大日本雄辯会、1927・7・7、魯迅入手年月日1927・12・5）の挿絵（「ハドソン河畔の秋色——著者」）として掲載されている。『北米遊説記 附米国山莊記』のこの挿絵がおそらく『思想・山水・人物』（北新書局）の挿絵として採用されたものと思われる。

日本語原文からの引用は、旧字体を新字体に改め、旧仮名遣いを新仮名遣いに改め、送り仮名はそのままとし、ルビ（一部残したところがあり、新たに付けたところもある）、傍点、傍線を省略する。

<sup>3</sup> 「魯迅对鶴見祐輔『思想・山水・人物』的翻譯」（王彬彬、原載『天津社会科学』2008年第3期）は、魯迅の入手した版本が、出版から日数が隔たっていないことにより、初版



- と判断する。しかし前述のように第三版と思われる。但し、鶴舞図書館所蔵本の第三版の日付に疑問があることは前述した。
- <sup>4</sup> 北海道大学図書館所蔵本『思想・山水・人物』（上海北新書局、1928、アンカット本）には、発行年のみ記載され、5月とは記載されていない。『日記十七』（1928年、『魯迅全集』第16巻、2005年版）の1928年6月1日に、「午后得小峰信并泉百及《語絲》、《北新》、又《思想・山水・人物》二十本。」とあり、これが根拠となつて、5月と判断されているものと思われる。
- <sup>5</sup> 前述のように、1928年4月3日の『魯迅日記』の記載により、訳了はこの日であり、「1928年3月」は誤りである。
- <sup>6</sup> 『上海図書館 館蔵中文報紙副刊目録（1898-1949）』によれば次のようである。「民衆週刊（京報・北京）本刊原名《民衆文芸週刊》、1925年4月7日第16期起簡名《民衆文芸》、同年6月23日第25期起改用現名。」
- <sup>7</sup> 用いた筆名が、「魯迅」であることを示す。
- <sup>8</sup> 『魯迅日記』の1927年6月27日の項に「寄小峰訳稿三篇。」とあり、『魯迅全集』第16巻（人民文学出版社、2005年版）注に従えば、「善政和悪政」、「人生的転向」、「閑談」の訳稿である。
- <sup>9</sup> 『魯迅日記』の1927年6月27日の項に「寄茅塵訳稿一篇。」とあり、『魯迅全集』第16巻（人民文学出版社、2005年版）注に従えば、「断想」の訳稿である。
- <sup>10</sup> 頁数は、『思想・山水・人物』（鶴見祐輔著、大日本雄辯会、1924・12・28初版）の頁数。以下同じ。
- <sup>11</sup> 『魯迅の『進化論から階級論へ』についての覚え書（上）（下）』（拙稿、『名古屋外国語大学外国語学部 紀要』第42号、2012・2・1、第43号、2012・8・1、後に『魯迅後期探索』〈名古屋外国語大学出版会、2016・10・20〉の第5章「進化論から階級論へ」として所収）
- <sup>12</sup> 魯迅は『魯迅景宋通信集』八〇』（1926・11・7）で、1926年11月の段階で、創造社との協力を望んでいた。  
「実際私もまだ少し野心を持っており、広州に行った後、研究系に対して打撃を加えたいとも思います。ただかきつと北京に行くことができなくなるくらいで、別に構いません。第二は創造社と連絡をとり、戦線を作って、さらに旧社会に進攻します。私はもう一度力を尽くして文章を書くのも、厭いません。」
- <sup>13</sup> 魯迅は『『三閑集』序言』（1932・4・24、『三閑集』、『魯迅全集』第4巻、前出、2005年版）で次のように言う。  
「私には創造社に感謝しなければならないことがある。それは彼らが私に幾種かの科学的文芸論を読むように『強要し』、先の文学史家たちが山ほど説明して、なお混乱してすっきりしない疑問を理解するようにさせたことである。このことからさらにはプレハーノフの『芸術論』を翻訳することとなり、私の——私のためにさらに他人にまで及んだ——ただ進化論のみを信ずるという偏りを補い正してくれた。」
- <sup>14</sup> 『北京の魅力』は次の章目に分かれる。「1. 五百年の風雨に晒されて」「2. 青空の下で王宮の黄色い薨が」「3. 驢馬は長い耳をふり乍ら」「4. 死ぬまで北京に」「5. 駱駝は貴族のように」「6. 珠簾の後に輝く眸」

- 15 魯迅は、「看鏡有感」(1925・2・9、『墳』所収)で次のように言う。  
「進歩しよう、或いは退歩しないようにしようとするれば、どうしてもいつも新機軸を出さなければならない、少なくとも異域から材料を取らなければならない。もしもさまざまな顧慮、各種の用心、さまざまな不平で、こうすれば祖先に背く、ああすれば夷狄に似る、結局びくびくして薄氷の上にあるかのように、ふるえて間に合わすことさえできないのであれば、どうして良いものを作ることができようか。」
- 16 「第28章 思想啓蒙——改造国民性：訳作与創作思想命題対観」(王家平、『魯迅訳文全集』翻訳状況与文本研究』、社会科学文献出版社、2018・5)は次のように指摘する。  
「魯迅の訳した鶴見祐輔隨筆集《思想・山水・人物》と国民性に対する魯迅作品の批判にも対話性がある。当書の第五篇『自以爲是〔ひとりよがり〕』はインディアンやユダヤ人、日本人等の民族の民族特性に対する分析をとおして、ひとりよがりの、みだりに尊大ぶる、伝統を固守する民族と国家はついには衰亡するという結論を得ている。このような思想は魯迅の深い共鳴を引きおこしたもので、鶴見祐輔のこの本を翻訳紹介するとき、魯迅は第五篇を選んで翻訳に着手する最初の篇としたのだろう。」(505頁)
- 17 魯迅は、「未有天才之前」(1924・1・17講演、『墳』)で次のように言う。  
「現在の社会の論調と趨勢は、一方でもとより天才を求めますが、他方ではそれを滅亡させよう、それを育てる土すらも一掃しようとしします。いくつか取りあげて言います。  
その一つは(整理国故)です。新思潮が中国に到来して以後、実際それは有力であったでしょうか。しかし一群の老人、さらには青年は、肝をつぶしたように国故のことを重視します。『中国には多くの良いものがあり、整理保存せずに、新しいものを求めようとする。(中略)』(中略)老先生が国故を整理しようとし、南の窓の下に埋もれて死書を読むのは当然かまいません。青年の方には彼らの生きた学問と新しい芸術があり、各々そのことをするのも、妨げることはありません。しかしもしもその旗〔国故整理〕をもって呼びかけるなら、それは中国が永遠に世界と隔絶することを求めることになります。」  
鶴見祐輔の「書齋生活与其危険」(前出)は、書齋生活と社会との隔離が書齋の知識人にもたらす危険性について、縦横無尽に論じている。
- 18 「北京の魅力」(鶴見祐輔、『思想・山水・人物』、前出)では、このアメリカ人が白人であるとは言及していない。しかし魯迅は、はっきりと白人と言う。
- 19 魯迅は、「灯下漫筆」(1925・4・29、『墳』所収)で次のように言う。  
「外国人の中で、知らずに賞賛する者は、許すことができる。高位を占め、悠々満ちたりた生活をし、このために惑わされ、天性をくもらせて讚嘆する者も、まだ許すことができる。しかしなお二種類あって、その一つは中国人を劣等人種とし、もともとのおりであるのがふさわしく、そのためことさら中国の旧物を賞賛する。その一つは世間の人それぞれ違って、自分の旅行の興味を増してくれることを望み、中国に行って弁髪を見、日本に行って下駄を見、高麗に行って笠を見る。もしも服飾が同じであるならば、つまらなくて味わいがなくなる、だからアジアが欧化することに反対しようとする。これらはみな憎むべきである。」  
ここからすれば、北京のこのアメリカ人も、魯迅にとってまだ許すことのできる部類であったと思われる。
- 20 厨川白村の『苦悶的象徴』(北京新潮社、1924・12)、『出了象牙之塔』(北京未名社、1925・

12) 等の翻訳が、魯迅の文学観や国民性批判と本質的に関わっていたことと比較すれば、1925年ころの『思想・山水・人物』の翻訳は、魯迅を深い思索に導いたとはいえ、「決して続けて訳していき、積み重ねて一冊の本をなそうとは思わなかった」というのが、当初の正直な感想であったと思われる。

魯迅と厨川白村については、「厨川白村と1924年における魯迅」（『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第8章として所収）で述べたことがある。

<sup>21</sup> 1925年ころ表面化した女師大事件において、陳西滢は北洋軍閥政府、女師大当局側に立ち、魯迅と熾烈な論争をした。さらに、3・18惨案の後、陳西滢は「閑話」（陳西滢、『現代評論』第3巻第68期、1926・3・27）で、発砲弾圧した警備隊と首謀者の責任に言及しながら、執政府の前を「死地」と称し、ここにデモ隊を故意に誘導したデモ隊の指導者に対する嫌疑を述べた。

<sup>22</sup> 「淡淡的血痕中」（1926・4・8、『野草』所収）の、「反逆的の猛士」に連なる姿と思われる。

<sup>23</sup> 「魯迅の〈個人的無治主義〉に関する一見解——附江坂哲也訳〈『革命物語』序〉（アンドレ・ピラート著）」（拙稿、名古屋大学総合言語センター『言語文化論集』第10巻第1号、1988・10・30、のちに『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1〉の第5章として所収）

<sup>24</sup> 「個人的無治主義」の二側面に対する魯迅の克服の過程について、『魯迅探索』（汲古書院、2006・1）の第5章の注31で述べたことがある。

「魯迅対鶴見祐輔『思想・山水・人物』的翻訳」（王彬彬、原載『天津社会科学』2008年第3期、前出）は、「政治とユーモア」（「断想」、1927・6・27以前訳了、広州にて翻訳）と「ユーモアに就いて」（前出、1926・12・7訳）を魯迅が翻訳したことについて、次のように述べる。

「この二篇の〈ユーモア〉を賛美する文章を訳した魯迅は、上海時期にはしばしば、林語堂たちが提唱する〈ユーモア〉に対して非難を示した。魯迅から見ると、林語堂たちが中国で〈ユーモア〉を提唱することは、『屠殺者の凶暴ぶりを、一笑に化さしめ、めでたしめでたしで納めさせる』ものである。魯迅は英国式〈ユーモア〉を賛美する文章数篇を中国の読者に翻訳紹介したし、また、林語堂たちが英国式の〈ユーモア〉を提唱することに極力反対したのである。これも当然一つの証拠とすることができるもので、魯迅が翻訳したものは、決して彼が賛成したものではないことを証明している。」

しかし「魯迅対鶴見祐輔『思想・山水・人物』的翻訳」（王彬彬、前出）の上記の指摘のように、30年代における林語堂たちの〈ユーモア〉の提唱に対する魯迅の批判をもって、20年代における魯迅の厦門時期の「ユーモアに就いて」の翻訳意図を推測するのは、無理があると思われる。私は1926年ころの時期を背景にした魯迅の翻訳の意図があったと推測する。

また、魯迅は、1926年12月8日付け、韋素園宛て書簡で次のように言う。

「来年の第1期に、創作はおそらくありません。『説“幽默”』を訳すつもりです。日本の鶴見祐輔の書いたもので、浅いですがけれども、かなりはっきりとしていて理解できます。」

<sup>25</sup> 「断想」は次の章目に分かれる。「1. 入日」「2. ピット」「3. マクドナルド」「4. ゼスレリー」「5. フェアプレー」「6. 恵まれたる国」「7. 古今千年」「8. ウィルソンの死」「9. 彼の随筆」「10. 政治とユーモア」「11. 大亜米利加人暦」「12. マシウ・アーノルド」「13. モーレー」「14. 明るい南国児」「15. 彼の女性観」「16. ベジヨット論」

「17. 新時代の開幕」「18. ラフォレット」「19. 英国を偉大にせる力」「20. 女王の御全盛」「21. フェビアン協会生る」「22. シドニー・ウェブ」「23. バーナード・ショー」「24. ウェルス」「25. オムレツを喰べ乍ら」「26. トーナー」「27. 政治は利権より奉仕に」

<sup>26</sup>『魯迅年譜（増訂本）』第2巻（李何林主編、人民文学出版社、2000・9増訂版）による。

<sup>27</sup>この当時魯迅が監視されていたことは、「通信」（1927・9・3、『而已集』所収）で次のように言う。

「私はまたどうやら、ある団体が自ら正統だと思ひこんで、思想を監督することを好んでいると感じます。私も監督される列にあるようで、時に尋問式の訪問者に会うことがあり、しばしば彼らであろうと疑います。」

また魯迅に身の危険があったことは、「答有恒先生」（1927・9・4、『而已集』所収）で次の記述がある。

「しかし今回、私に最も僥倖なことは、結局共産党にされなかったことです。以前或る青年は、陳独秀が『新青年』を出し、私がそこで文章を書いたことがあることによって、私が共産党であることを証明しようとしてしました。しかし別の青年によってくつがえされました、彼はそのとき陳独秀さえもまだ共産主義を語っていなかったことを知っていました。一步退いて、〈親共産派〉にしても、結局成功しませんでした。もしも私が中山大学から出て、すぐに広州を離れたならば、私は、そこへ並べ入れられることになっただろうと思います。しかし私は行きません、だから新聞で『逃げた』『漢口へ行った』と騒いだあと、むしろ大丈夫だったのです。」

増田渉は「解説」（『魯迅選集』第7巻、岩波書店、1956・9・22）で次のように言う。増田渉は、1931年当時、「魯迅」（林玉堂著、光落訳、『北新』第3巻第1期、1929・1・1）を読み、直接魯迅にスパイの件を尋ねたと言う。

「すると魯迅は言った。

『そんなこともありましたがよ、実は彼らはスパイなんかなる資格もないバカですよ』

『学生ですか、そのスパイは？』

『学生です、だが何も知らないんです、どうせ反動派の手先になるやつだから、そんなもんです。』」

<sup>28</sup>「中国文学家对于英国智識階級及一般民衆宣言」（『洪水』第3巻第30期、1927・4・1）を指すと思われる。末尾の署名者に、「成仿吾、魯迅、王独清、何畏等」とある。

<sup>29</sup>また、「解説」（増田渉、『魯迅選集』第7巻、岩波書店、1956・9・22）は次のように魯迅の言葉を引用する。

「『国民党は有為な青年を陥害に落としこんだ。初めは、共産党は機関車で国民党は列車だ、革命は共産党が国民党を引っばるることによって成功するのだといった、あるいは革命の恩人だということでポローヂン（当時、革命指導者としてソ連からきていた）の前で学生一同に最敬礼をさせたりした。だから青年は誰もが感激して共産党に入った。すると今度は突然、共産党なるが故に彼らを片端から殺した。この点は旧式の軍閥の方がまだ人がいい。彼らは最初から共産党を容れず最後までその主義を守った。彼らの主義が嫌なものはだから寄りつかないとか反抗するとかすればいい。だが国民党のとったやり方はまるでペテンだ。その殺し方がまたひどかった。たとえば殺すにしても脳天へ一発の

弾丸を打てばそれで目的は達せられるはずなのに、刻み斬りだとか生き埋めだとか、親兄弟までも殺したりした。僕はそれ以来、人をだまして虐殺の材料にするような国民党はどうしてもいやだ。憎しみがこびりついてしまった。僕の学生をたくさん殺した。』

<sup>30</sup> 魯迅は、「怎麼写——夜記之一」（半月刊『莽原』第18・19期合刊、1927・10・10、『三閑集』所収）で、中山大学学生畢磊の逮捕とその後の死について惜しんでいる。

<sup>31</sup> また魯迅は、上記引用（「魏晉風度及文章与薬及酒之關係」、前出）の直後に、軍閥を喩えに出して言う。

「今分かりやすい比喩で言いましょう、例えば或る軍閥が、北方において（中略）、これまで国民党を抑圧していた。のちに北伐軍の勢力が大きくなり、軍閥は青天白日旗を掲げて、自分はすでに三民主義を信じるようになり、総理の信徒となったと言います。これではまだ不十分だとし、軍閥は総理の記念週間を行おうとします。このとき、真の三民主義の信徒は、行きますか、行かないですか。行きません、軍閥のほうはあなたが三民主義に反対したと言い、罪を言いわたし、殺します。しかし軍閥の勢力の下で、ほかに方法がない以上、総理の真の信徒は、むしろ三民主義を語らないでしょう、或いは人がわざとらしく語るのを聞いて、眉をひそめ、あたかも三民主義に反対するかのようです。」

こうした、国民党右派の目をくらます巧妙な煙幕が張られていたと思われる。

<sup>32</sup> 「魯迅」（林玉堂著、光緒訳、『北新』第3巻第1期、1929・1・1）は次のように言う。

「これはちょうど、かつてパリサイ人がシーザー像のある貨幣をイエスに渡したとき尋ねたあの問題（『マルコによる福音書』第12章に見える）に似ていて、その状況は同じである。もしも魯迅が断れば、当局を尊重しない『態度』を表明したものであるとみなされるであろう。魯迅はむしろそのようにせず、いっそう聡明であった。彼は承知した。彼は明快流暢に面白い話をした。語ったのは紀元前3世紀〔紀元3世紀の誤り〕の文学状況であった（案ずるに『魏晉風度及文章与薬及酒之關係』の講演を指す）。その講演のなかで、当時或る学者たちが政治上の面倒を避けるために『いったん酔えば二ヶ月』とならざるを得なかった物語を説明した。聴衆は面白いと思い、彼の創見と全篇の精彩ある解説に讃嘆し、しかも当然に、その要点を見だせなかった。」

「しかし魯迅はどうやら目的を達した。彼は自分が古代のことがらの問題を考察する学者にすぎないことを示した。これは当時の権勢者たちを満足させることになった。イエスもかつてまさしく同じく世の中に応じた知恵を示した。彼らの注意は緩んだ。緩んだときに、魯迅はこの機に乗じて上海にやってきた。」

<sup>33</sup> 馮雪峰は、『回憶魯迅』（人民文学出版社、1952・8、底本は、『魯迅卷』第8編〈中国現代文学社編〉）で、蒋介石、国民党右派による4・12反共クーデターが階級闘争であったとする、1929年前半の魯迅の発言を次のように記す。

「『今回もやはり青年が私に教訓を与えました。……私は進化論を信じて、青年は必ず老人に勝り、世の中で青年を圧迫し殺害する者はたいてい老人である。老人が早く死ねば、だから将来はより良くなるであろう、と思っていたのです。しかしそうではなく、青年を殺害する者は青年であり、あるいは密告し、あるいは自ら捕縛しました。以前軍閥が青年を殺したとき、私は悲憤しました。今回はもう悲憤する時間もなく、驚いて呆然となっていました。私の進化論は完全に破産した。』

『階級闘争は、人が承認しなくても良い。事実の教訓は必ず理論の宣伝より有力です。』  
『階級闘争は、確かに人を驚かせ寝食を不安にさせるでしょう。しかし誰がまず階級闘争  
を実行するのか。口先で宣伝する人ではなく、口には言わず、世の中に階級闘争がある  
ことを承認しない人です。革命者ではなくて、手に刀をもった反革命者です。』  
このように、1929年前半の段階において魯迅は、1927年の4・12反共クーデターを階級  
闘争の実例と認識したことが分かる。

また、魯迅が進化論から階級論にどのように移行したのかについて、「魯迅の『進化論  
から階級論へ』についての覚え書(上)(下)」(『名古屋外国語大学外国語学部 紀要』第  
42、43号、2012・2・1、8・1、後に『魯迅後期試探』〈名古屋外国語大学出版会、2016・  
10・20〉の第5章「進化論から階級論へ」として所収)で述べたことがある。